

欧州の一隅で

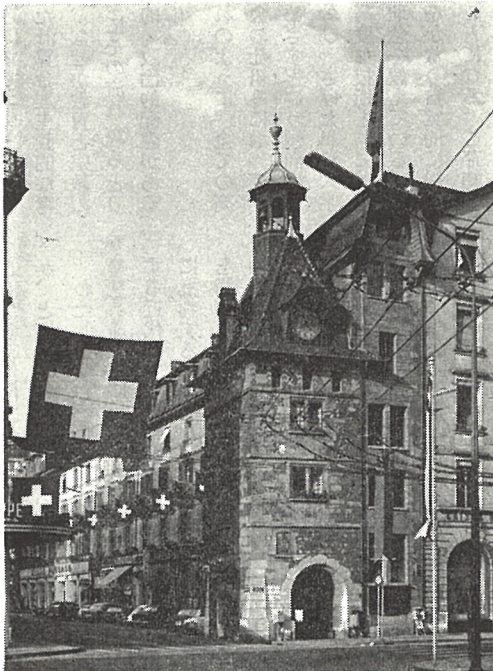
空想した「同志社」

武 邦 保

だれでも同じように思うことだが、あちらの人々は日本人ほど「せかせか」と歩かない。街を歩いていて、やはり気になるのが日本人観光客。それはまた、私も日本人だという自己認識作用の一つでもあるのだろう。

さて、ヨーロッパでは大学がいまだ「高等な特殊教育をなすところ」という印象が、大衆化されたわが「大学立国」との比較において鮮明に映ずる。また、それは進学率が低いことから言えるの

であろう。スイスの大学は——というよりスイスという国は、九州よりやや小さな領土でありながら、全くまとまった一つの国ではなく、あくまでもフェデレーション（聯邦国家）であって、大学もまた——ほとんど各州立ということになっている。そこで宗教と政治の関係も含めて語るならば、歴史的にドイツ、オーストリア、イタリア、フランスという列強に囲まれつつ、経済的、政治的にも独立しようとしてきたのであるから、これらの近隣諸国に対抗（プロテス



ジュネーブのモラルド広場と時計台の城門

ト)できる宗教は、スイスの精神的支柱として必要であった。したがって、ほとんどの大学が神学部をもち、その外に法学部や理科系学部が配置されている。

そしてスイスには、文化と宗教を中世から近代へ脱皮させた一つの実験地という史的な香りがある。山に咲く花を愛するシュネープの町を観光した人たちが必ず立ち寄る二つの場所、レマン湖に浮かぶ「ルソー島」と大学校庭の一隅に立つ宗教改革者(カルヴァンやノックスたち)の立像周辺であろう。彼らは、いずれにしても個人と社会の合理的な契約関係を啓蒙したことで、永く評価される人たちであろう。つまり、そこには全ての個人が人格者としての深い理念(価値観)をもって、その実現のために相協働してゆく型が、宗教や教育や生産の全ての前提として生活の中に確立されているという印象である。

そして、ドイツの大学もそうであるが、スイスにもいわゆる「マス・プロ」教育はない。もちろん、大衆社会化現象なるものは、たとえば情報産業の発達ひとつをとっても認めることはできるが、産業(精密科学工業や酪農経営)の高度なものがそこにあるとしても、

そして人々の生活の仕方にまでコンピュータシステムに管理された計算合理主義的な考え方が支配してきても、なぜか教育と宗教の分野だけは意図的(？)にその流れからとり残してゆくような常識的・政治的配慮があるように思われた。

つまり、わが国のそのように、全ての高等教育機関が、産業社会の仕組みに沿って、期待される総合大学をめざすという傾向はない。中世からの伝統をひきつげた単科大学は、そのままの様式で高度な技術と共に、相変わらず古典的な深い理念を教えている。そこで、学生もこの二つをかなり自覚的に総合的に求めているということになる。ご存知のごとく、その中には、日本でいえば「各種学校」、「専門学校」に当たるようなものもあるが、専門バカをつくらない職人社会の伝統が「別格教育界」に残されているところにヨーロッパの生命があるともいえるだろう。

二

しかし今日、西洋と東洋の政治的・文化的相違を語ることはやさしい。西洋も東洋も含めた地球世界の存在について、現代ほど絶望

的になる時代はほかになかったのではないかと、という印象が今は強い。

わたしの接した限りのドイツ系の学生(議論好きな連中)は、ヨーロッパから生まれたとする近代的知識の集積を、その上ラディカルに批判する傾向をもっていた。しかしそこでも講義され、論じられることは、きわめて詳細にわたる資料に従った「知識」であり、またそれに必要な「技術的情報」であった。

若干の批判を恐れずに申せば、そのような姿勢をとっている日本の専門機関は、私学よりも国公立大学やその研究所などである。しかし、概して日本の研究者は「技術」と「理念」を総合することにおいてきわめて幼稚であり、下手であることを痛感する。実はこれはわたしのごく小さな体験からであるが、日本の機関では資料を「客観主義」という学問の方法論上の基礎的(？)限定から、さらにその資料をよりまとまった、また一つの資料として他に伝達するためでしか扱わない。いや扱えないのである。これが学の厳しさだと自らも納得している。

しかし果たしてそうであろうか？あらゆる科学は、当然のことながらそれ独自の技術的

分野を保持し、これを発展させている。しかし、「科学」それ自身が歴史・哲学や社会倫理の投影であり、またこれを展開させるという関係にもあることを、どれだけの技術修得者が自覚しているのだろうか。

経済的効率のよさと便利さだけで、「技術・開発」の哲学（？）的な価値基準——つまり、「素晴らしい技術だ」という断定——をいつまでもなしていいのだろうか。

科学をなすことによって一定の技術を得得しているわたしたちが、このような判断で生活し、行動しているということは、ヨーロッパの大学人・知識人にとって驚きでさえあった。そこで彼らはむしろ日本の中世はどのような宗教（倫理）が盛んであったのかということに鋭い観察眼を向けてくる。わたしもしばしば教授たち、学生たちからその矢を向けられた。広義の「哲学」と近代「技術」の諸問題を総合した議論には——言語のハンディもさることながら——正直のところなかなかついてゆけないのである。

翻ってわが同志社の高等教育はどうであろうか。大学のゼミナールや高等学校の教室での教師と学生・生徒との対論の中に、少しで

もこのような総合的判断が生かされているであらうか。そして、教師労働者論か何論かしないけれども、「同志社教育」に総合判断の人格者として参加している自覚は——とくに大学レベルに——少なくないのはなぜだろうか。夕食後のゼミナールにまで奉仕するあの教授たちの姿から、ひとこと反省をこめてわが同志社に自問したい。

三

今や同志社は、第一に、一刻も早くマスプロ教育を徹廃する方向で経営を立て直すべきだ。すでにおそいという計算もあるだろう。しかし、要はその任に当たる人々の「教育の良心」にかける決断でしかない。ヨーロッパで感じたことは、大学進学が幸福論と直結していないという気風であった。日本の現実には、「東京帝大」の偉風と共に、そのようにはいかないだろう。しかし、同志社は東大自身が開う以上にもっとこの偉風と闘うべきではないか。そして、青年に「幸福」論を進学と安易に直結させないで、もっと深い魂の生存の確かさと喜びを発見させるのが急務ではないだろうか。

第二に、同志社はかつてのように、しかし新しい感覚と設備をもった専門学校群を編成することである。今出川の良心碑を核として、その小さな群は各地に広がることも必要である。研究所群からなるというのがバーゼルの大学であった。

第三に、教職員は時間で「同志社」に使われるような労基法意識を越えたいものだ。法は人の生活規範の最高でなく、最低の線なのだから。官立大学以上に厳しい管理体制はどうしたことか。新島は、「隆なる」今を予想して、夫人と門弟にこう伝えた。「同志社の前途は基督教の徳化、文学政治等の隆興、学芸の進歩三者相伴ひ相待て行ふ可き事。同志社の目的は其の神学・政治・文学・科学等に従事するに係らず皆精神活力あり、真誠の自由を愛し……」と。（傍点・筆者彼は、少なくとも求められている総合的判断に立つ教育と自由な研究を小さな同志社で試みようとした一人の開拓者であったのだ。）

（女子大学教授・聖書）